

虹

光野 朝風

## 虹

---

君は急に虹を見に行こうと言い出した。僕は見ようと思ったときに見られるものではない虹をどこに行ったら見られるのかまったく心当たりがなく、君に聞いた。

「どこに行けばいいの？虹なんてどこにあるの」

君はニコニコしながら僕に言った。

「そんなの外に出てみればいいことよ」

僕は困ってしまった。

「外って言っても、そりゃ外には虹が出るかもしれないけど、いつ出るかもわからないじゃないか。それに、外に出ても虹は出ないかもしれない」

君は口を尖らせて、「うー」と、うなった。

「でも、外に出なきゃ見られないでしょ？見られるか見られないか、計画的に物事を立てて、その通りにできなきゃ無意味なことなの？」

「・・・そこまでは言っていないけれど」

「じゃあまず出ましょうよ。外に」

僕は君の言葉に背中を押されるようにして外へと一緒に出た。

玄関から外に出ると雲ひとつない晴れ晴れとした青空が広がっていた。鳥が楽しそうに歌い、緑は日に照らされてキラキラとしている。とても雨は降りそうにないし、ましてや虹なんてかかりそうな予感すらも起きない。僕は君のわがままにつき合わされているのではないかと正直に思った。でも、君がやろうと言い出すと、何を言ってもきかないので、僕はしぶしぶ付き合う形になった。

「山がいいな。山に行こうよ。頂上」

君の突発的で少々強引な提案に僕は黙って車を走らせる。それでも君は楽しそうで、僕のふてくされようを責めようとしなかった。そのかわり、窓を開けて風に吹かれているだけで、あまり僕に話しかけてこない。怒らせたのではないかと少しだけ不安になりながら車は山道を登っていく。くねる山道をゆくと、空気が少しずつ冷えていく。逆に涼しいくらいだ。

平地とは違って、少し湿度が上がっているような気がする。多少じめじめした空気が満ちてきているのがわかる。

空は晴れているのに、森は濡れているように感じた。昨日ここで雨でも降ったのだろうか。植物や土が多くの水をたたえ、自然の香りを漂わせている。土や緑や枯れ木の匂いが鼻をくすぐる。

。

「ひとつ聞いていい？」

「ん？」

急に僕に話しかけてきた君の声に少し驚いた僕は、妙な声を出してしまった。

「どうしていつもやろうとする前に文句言うのかな」

「文句じゃないよ・・・」

どことなく責められているようで心地が悪かった。今だって君の言葉に従っているじゃないか

。

「だって、例えば私が鳥だったら飛び立とうとする前にいつも足を掴む感じでしょ？」

さすがに僕は君の言葉にむっとした。それほど邪魔だと思うなら一人でやればいいじゃないか。だんだんと僕の心は不機嫌になってくる。

「やらなきゃわからないことだっていっぱいあるのに、あなたはいつもやる前にわかったように決め付ける。なにもわかってないのに」

「いいかげんにしてくれよ。僕を責めたいのかい？」

「違う。ありのままをちゃんと見ようとすることをして」

時々君はよくわからないことを言う。僕の頭でもちゃんと理解できるように言って欲しいけれど、君は時々物凄く直感的に物事を言うことを知っているから、僕はそれ以上の会話をやめた。半分開けていた窓を全開にして、しめった涼しい空気を浴びることにした。

だんだんと雲行きが怪しくなってくる。平地ではあれだけ晴れていたのに、山の天気はわからないものだ。僕がちらりと君を見ると、ウキウキしてたまらない様子だった。先ほどよりも嬉しそうにしている。何がそれほど楽しいのか僕にはわからなかった。

頂上についたころ、眼下はもう霧がはっていて何も見えなかった。いつもなら街が綺麗に見られるはずだけれど、今にも雨が降りそうだった。それでも君は「外に出ていようよ」と言って僕を車の外へと連れ出した。

僕は目の前に広がる何もない景色にうんざりしながら、「何もないよ。つまらないよ」とぼやいた。

「どうして意味を与えられようと待っているの。意味や理由は自分が見つけていくものでしょう。どうしてこれだけたくさんのものであるのに何も感じないの？私は不思議でならない」

——そんなこと言われても・・・

内心まいていた。だって何もないじゃないか。何も見えないほどの霧。霧のために服がだんだんとしめってきて、肌に張り付いてくるようで気持ちが悪くなってくる。さっさと車に戻って家に帰りたかった。

「霧なんて見ていたってしょうがないよ。もう今日は何もないし、もう行こうよ」

すると君は声をカッと荒げて言った。

「違う。何もないわけじゃないよ。無視しているだけよ」

「無視？僕が何を無視しているの？」

「どうして感じることをやめようとするの？」

「いいかげんにしてくれよ。僕をいじめたいだけじゃないのかい？」

「違う」

君がそう叫ぶと同時に、ポツリ、ポツリと大粒の雨が降ってきた。それがだんだんと多くなって埋め尽くすような雨がザッと降ってきた。僕が車に戻ろうとすると、君は僕の手を掴んで離さない。もう怒る気にもなれなかった。濡れることを覚悟して僕は彼女といることにした。

ボタボタボタボタと頭を大粒の雨粒が叩く。シャワーよりも激しい雨が体を打ち、視界をより陰しくする。先ほどの霧の状態よりも何も見えない。もう服はずぶ濡れだった。

君は空へと手を広げて雨を待っていた花のように雨を受け止めようとしている。激しい雨に縮こまっていた自分は、君のまねをして空へと顔を向け、手を広げ、雨を受け止めていた。

目を開けないほどの雨。顔を叩く雨粒。目をつむった暗闇に響くのは雨の様々な音だった。気持ちが落ち着いてくると、僕の荒立った気持ちに声を潜めていたものたちがしゃべりはじめるようだった。土を打ち付ける雨の音。服を打ち付ける雨の音。肌を打ち付ける雨の音。緑を打つ雨の音。石を打つ雨の音。君を打つ雨の音。手に感じる雨粒の重み。雨から伝わる体への感触。そして、少しだけ雨にあたった場所がほてっていることに気がついた。

——あ・・・

その時僕は気がついた。感じもせずに僕はすべてを無視していた。そこへ飛び込んで何かを感

じもしないうちから怠惰な気持ちだけが後ろ向きに自分を引っ張っていた。僕の感覚のすべては閉じていて、開こうともしなかった。

感じることは、今。感じようとすることは未来。未来から今へ。そして感じたものが過去。今この体のすべてに感じるもの。空という未来から流れてくる雨を受け止めようと二人で必死に感じている。僕は雨の中でずっと泣いていた。目の奥が熱かった。きっとこの感動が過去へと積み重なって素晴らしい支えになっていく。僕が、感じているすべて。

雨の中で息を吸い込み、吐く。雨の匂い。

だんだんと雨が弱まり、雲間から光が射してくる。霧は晴れ、街がうっすらと見えるようになってくる。スポットライトのように雲間からの光が街をいくつも照らす。雲が流れ、光は街をすべるように移動する。雨は完全にやんだ。

僕が君のほうへと目をやると、君はまだ空へと手を広げていた。そこへ光がずっと当たって、まるで君が光を受け止めているように輝きだした。ここに来ることを最初からやめようとしていたら、君のその姿は見られなかったし、僕は何も感じられなかった。心から君へと感謝したい気持ちにあふれた。

「妖精みたいだよ。森の妖精」

僕の言葉に君はようやく目を開き、僕を見て、「どうして？」と言う。

「こうなることがわかっていて、僕を連れ出したみたいだから。空のことも緑が君に教えてくれたのかなって」

そう言うと君は幸福な笑みを浮かべて言った。

「私はやってもいないことに結果を求めたりはしないだけよ」

「そりゃそうだ」

今はすんなり君の言葉を受け入れられた僕は心がふっと晴れていくようで、気持ちよくなって笑い出した。それにつられ、彼女もつられるように笑っていた。虹は眼下にしっかりと色鮮やかに浮かんでいた。